

消えゆく言葉(客家語)を追いかけて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 張, 盛開 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008850

消えゆく言葉（客家語）を追いかけて

張 盛 開

私は2012年度静岡大学人文社会科学部に赴任以来、アジア研究の予算をいただき、華僑の言語—中国湖南省平江県の塘坊客家語の研究を進めてきた。この三年間の成果の一部はすでに学会で発表し、論文にもまとめている。本稿は学術以外の話をしたい。以下主に客家語に出会ったきっかけ、客家語研究を続けようと思った動機、客家語研究におけるフィールド調査、今後の目標という内容から順番に述べていく。400年前の先祖の居住地をそらんじる老人に会うなど客家人の文化にも触れることが出来たことなど、余話もはさんでみる。

1. 客家語に出会ったきっかけ

客家語に出会う話を始める前にまず私が方言研究をどのようにして始めたのかを紹介したい。

私が方言研究に目覚めたのは2003年である。大学在学中、言語学の授業で未明言語の解説というレポートを課せられ、その解明過程において、大いに楽しめたので、言語学の面白さを感じたのである。元々方言に興味があった私は文献を探しても自分の母方言（湖南省平江県の方言）についての記述が極めて少ないことが判明した。そして、大学の卒業論文に方言の記述をしたいと指導教員に相談したら「ぜひ



Copyright© 2003-2004 中国まるごと百科事典

図1 平江県の位置

そうしてください」と背中を押された。それ以来方言の記述を10年余してきた。そのためのフィールドワークは毎年欠かさずに行っている。卒業論文を書き上げるまでは時間の制約などで直接フィールドワークはできなかったが、電話での調査は随時行った。卒業論文を仕上げた春休みに遂に人生初のフィールドワークができた。文献の記載により、平江県に「客家語」があるということを知り、びっくりしたことがあった。そこに二十年も住んでいたのに、聞いたこともなかった。この機会に必ず探し出してみようと思ったのである。そして私の客家語探しの旅は始まった、2004年3月であった。

まず地元の事情に詳しい親戚に客家語を話す地域について尋ねた。その結果、近くなら思村郷百福洞にあるとのこと。そして思村郷役所に辿り付き、百福洞の場所を探すべく人に聞いた。その結果、塘坊村の村支書（村の党書記）李固定氏に聞けば、事情を教えてもらえるという。

李固定氏を探して、塘坊村に向かった。塘坊村は山の中にあり、道路もあまり整備されていないため、思わぬ時間がかかった。しかも、途中出会った村人たちに「客家語を話す人を探している」と問いかけても、答えは一様に「聞いたことがない」であった。私も本当は誰もいないのではと内心の疑念を抱き始める。

その日、平江城関を出発したのは朝9時である、14時ごろにやっと李固定氏の家に辿りついた。李氏に「客家語を話す人を知っているか」と聞いたら、「私がそうです」との答えをいただいた。この時は本当にほっとして、「探した甲斐があった」と喜んだ。昼過ぎで、近くに食事できる場所もないので、客家語を話せない李夫人に昼ご飯を作っていただいた。料理を待っている間、私は人生初の客家語調査を始めた。この日は到着も遅いため、あまり調査できなかったが、「私の故郷平江県に客家語が存在する、この耳で聞いた」ということは大きな意味を持っている。

塘坊村に居住している客家人は客家語と地元の方言、平江県思村方言のバイリンガルである。平江県思村方言は私の話す三陽方言と同じく平江県の標準方言である城関方言の下位方言であり、二つの方言の間にはほとんど差異が認められない。ゆえに、私たちの会話はすべて平江城関方言である。要するに、私は自分の方言を使って客家語の調査をしているのである。ご参考まで以下に私が2009年に提出した博士論文にて提案した平江県の方言区分を紹介する。

平江諸方言を私の調査したデータに基づいて区分すると、下記のように、6つの地域に分けられる。

平江諸方言	①	城関方言地域	城関鎮、三陽（白箬）、鐘洞、思村方言等
	②	東北方言地域	長寿、虹橋、龍門方言等
	③	北方方言地域	南江、板江方言等
	④	西郷方言地域	伍市、三聯方言等
	⑤	岑川方言地域	岑川方言
	⑥	塘坊方言地域	塘坊方言



図2 平江諸方言の区分

①は典型的な平江方言地域であり、②、③、④はそれぞれの自分の特徴を持っているが、典型的な平江方言に近い特徴を持っている。⑤は典型的な湘方言であり、⑥塘坊方言は塘坊村の客家方言を指す。思村方言は①のグループに入っており、私の故郷白箬と同じ方言を話す。

一回目の客家語調査では中国の方言調査でよく利用される丁声樹・李榮（1956）を使った。声調（240字）、声母（113字）、韻母（107字）を読んでもらい、基礎語彙173を聴き取った。文法項目を調べるための文法用例文37文を客家語で話してもらい、録音した。さらに漢語方言調査でよく使う短い物語（北風と太陽）を語っていただいた。調査が終わる直前に、李氏の伯母何意英氏が来訪し、二人に客家語で会話をしていただいた。もちろん私はほとんど理解できなかった。何氏は70代であり、客家民謡もたくさん知っている。「次回来たら、泊まっていてください。そしたら客家民謡も教えてあげる」と約束してくれた。しかしそれが最後の機会であったと知ることになるのは10年後の2013年であった。



写真01－左から2004年調査時の筆者、何意英氏、李固定氏

2. 客家語研究を続けようと思った動機

最初の調査は興味半分であった。その後、調査に行かなくては思いながらも自分の修士論文、博士論文の主要研究対象ではないため、客家語の調査には行けないままであった。

陈晖・鲍厚星（2007）によると平江県内の客家語は「平江県南部と東南部の芦洞、思村、献冲、加義、黄金洞などの郷や鎮の連雲山及び山麓地帯」に分布しているとしている。そのうち私が調査しているのが思村郷（今は福寿山鎮）塘坊村の客家語である。湖南省とりわけ平江県においては、客家語は劣性方言である。特に塘坊客家語は地域が極めて狭く、話者もとても少ないため、消えかけている状態である。

平江県の中心地（城関鎮）から塘坊まで約45キロ、塘坊から加義まで約30キロ、塘坊から黄金洞までは約50キロ離れている。塘坊の客家語話者には「県内の他の地域の客家人と交流は持っていない」ということを確認済みである。

塘坊村は平江県の南端に近い福寿山の海拔約900メートルに位置しており、景色のよい山の中である。昔は紙銭（神様への献上用）作りが主たる生業であったが、今は道路も整備されているため、観光業と箸生産業が盛んである。客家語調査に協力していただいた人々はそれぞれ観光業や箸生産業に関わっている。



写真02－塘坊村からの眺め



写真03－調査期間中の滞在先（民宿兼田舎料理店、オーナーが客家語の話せない客家人）

2004年の調査時には客家語を話す人は何十人かはいると聞いた。しかし10年後の2013年の調査時は話者は20人以下になったという。2014年の調査時には地元に住んでいる話者は10名となり、そのうちの一人は高齢者で耳が遠いため、普通の会話も困難であり、言語調査には向いていない。最も若い方は47歳であるが、自分の話す客家語について深い認識があり、消えないようにするために、将来孫に教えたとも言っている。地元の人の話ではもう一つの家族が客家語を話せるが、村から10キロほど離れている官塘鎮に住んでいるという。

地元の人々の話によると、二、三十年前は生産隊（村以下の単位）で客家語を共通語にしていた。会議の時でも客家語を使用していたという。しかし、話せる人がだんだん減っているため、客家語の使用頻度が次第に低くなっていく。今は客家語話者二人が会ってもほとんど客家語を使って話をしないという状態になってしまった。みんなの話によると、出会ったときに客家語で挨拶し、話しかけてくるのは村中で李固定氏一人のみという。このことは実際に私の調査においても確認している。漢字は読めて、語彙は言えるが、二人で適当に話すようにとお願いすると、なかなかちゃんとした会話にはならなかった。普段からあまりしていないからできないと言っている。第一回の調査時にすでに自分たちの言葉は消えてしまうと心配している話者がいるので、危機意識は持っていると言える。しかし、自分ではどうしようもできないとあきらめている。客家語話者が減る原因は下記のようなことが考えられる。

第一に、客家以外の人との通婚により、徐々に客家語を話せない母親が増えてきたことにある。母親が話さないと子供にも影響を与えてしまう。

第二に、出稼ぎなどで客家語を話さない地域に出ている若者が増え、客家語を話す環境がなくなり、ついには話さなくなってしまう。

第三に、客家語は家族内や村の中でしか使わない言葉で、今や村内でも思村方言が常用されていて客家語の優位性はなく、客家語による外部との交流の必然性もない。実際に平江県ではいくつかの地域で客家語を話しているが、塘坊客家人はよその客家人と交流を持ったことはないという。これも客家語の

消失していく原因につながる。

客家の祖訓には「寧売祖宗田，不売祖宗言」（祖先の田んぼは売っても祖先のことばは売らない）という有名な句がある。これを守ってきた結果、異言語地域への小集団が移住400年後もまだ客家語を維持していることは驚くべきことである（注：逆算すれば客家人のこの地への移住は明代末から清朝初期となる）。しかし、今の塘坊村の状況では今や限界に来ている。2004年の調査では、李固定氏とその叔母何意英の会話において、このような言葉がでた。70代の方が、子供たちが客家語を話せないことを嘆いているという。更に息子たちに客家語を伝えられなかった李固定氏は村の権威の年配者に「お前はもう祖先を売ってしまったのだ」と非難された。李固定氏の返答は「誰も習おうとしてくれないから、どうしようもないんだ」という状況であった。

塘坊村の客家人は自分たちの客家語を「広東声」（広東訛）と呼んでいる。その家譜にも広東省から移民してきたことを記載しているという。曾福寿氏は自分の祖先は「広東省興林県九把禾村李桃樹下小屋樹場」から移住してきたとはっきり記憶している。ちなみに私はこの「興林県」をgoogle地図などで幾度か調べてみたが、それらしき地名は見つからなかった。

李氏一族は自分たちの祖先はまず広東から江西に移住し、約200年居住したあと、平江塘坊に移住したと主張している。平江ではすでに200年住んでいるとのことなので、広東を離れたのは約400年前ということになる。

曾福寿氏の話では、塘坊村には十何年前から広東より移住してきた家族が住んでいるという。彼らの話す客家語は自分たちの客家語とは少し違いがあり、会話している時に、内容を理解できない時がある。

3. 客家語研究におけるフィールド調査の詳細

客家語の研究において、これまで私は5回フィールドワーク調査を行なった。塘坊客家語は三回、台湾の客家語は二回である。台湾の客家語を調査したのは塘坊客家語との比較対照をしたためであった。その上、台湾客家語も一時は話してはいけないと禁止されながらも今のように普及した状態であるので、そこでの言語復帰のコツも探りたかった。

塘坊客家語の調査は三回行なったが、初回は前述の通り、ほんの二時間のみであり、あまりデータを集めることができなかった。以下は主に2、3回目の調査について述べる。

初回の調査は2003年、方言研究に入門したばかりの頃であった。10年過ぎた2013年、アジア研究プロジェクトのおかげで、やっと塘坊村を再訪する機会ができた。10年前とは大きく変わり、道路は整備され、かつて四時間かかった道が一時間でついた。何氏を訪ねていったが、何氏はすでに10年前に他界したという。幸いに何氏の子息李献章氏が調査の協力をしてくれた。その日10時ごろに塘坊村に到着し、ある田舎料理店の前に人の集まりがあったので、そこで李固定氏と何意英氏を尋ねた。そこで出会ったのが何意英氏の二男、李献章氏であった。母親より10年前に私が調査を行なったことを聞かされていたとのことで、当方の用件をすぐに理解してくれた。そこで何意英氏はすでに10年前に他界したことを聞かされた。あいにくその日、従兄の李固定氏も留守であった。私の困惑を見て李献章氏は出かける予定をキャンセルして、終日私の客家語調査の協力をしてくれた。そのおかげで時間を有効に使い、一日で大量のデータ（語彙1200、漢字1000、語りや会話）を収集することができた。改めてご協力を感謝したい。



写真04－李献章氏の客家語を録音中

2014年はこれまで収集した大量のデータを有効に使おうと論文をまとめ、学会発表も予定していた。そして8－9月にデータを整理、分析した。李献章氏より収集した1200語から音韻体系をまとめ、いくつかの点を確認できれば、この論文は完成できるという状態にし、満を持して塘坊を訪ねた。思いもよらないことに50代だった李献章氏は他界していた。このことを聞くと、なぜか昨年の調査の時点で既に予感していたかのような思いが湧いた。一年前の調査で私がとった録音やビデオが彼の残した最初で最後の客家語資料となったのである。結果的に予定していた音韻関係の内容の確認はできなかったのも、論文も発表も急遽別の内容に変更せざるを得なかった。高齢者に依存するこの種の調査では、ありがちなことである。私は一日も早くこの塘坊客家語の記録を完成しなければならないという使命を改めて感じた。

今回は時間に余裕を以て、一週間ほど滞在し、曾福寿氏の協力を得て、データ収集に成功した。さらに李固定氏の弟の李朝暉氏与李献章氏の兄李基定氏が調査に協力してくれた。

表1 調査協力者一覧

順序	調査 時期	氏名	生年	性別	出生地	母方言	6-13歳 所在地	調査内容
1	2004	李固定	1951	男	塘坊村	塘坊方言 平江思村方言	塘坊	漢字、語彙、文法、語り、会話
2	2004	何意英	1933	女	塘坊村	塘坊方言 平江思村方言	塘坊	語彙、会話
3	2013	李献章	1963	男	塘坊村	塘坊方言 平江思村方言	塘坊	漢字、語彙、会話
4	2014	曾福寿	1947	男	塘坊村	塘坊方言 平江思村方言	塘坊	客家方言特徴語彙、会話、語り
5	2014	李基定	1953	男	塘坊村	塘坊方言 平江思村方言	塘坊	語彙
6	2013 2014	李朝暉	1967	男	塘坊村	塘坊方言 平江思村方言	塘坊	漢字、文法例文、会話、語り

1と6は兄弟、3と5は2の息子であり、1と6は3、5とはいとこ関係である

李固定氏兄弟二人（李固定、李朝暉）は客家語を普通に話せるが、その配偶者及び子供はほとんど客家語が話せない。兄弟二人の会話は客家語を使うという。李基定氏兄弟二人（李基定、李献章）は客家語を話せるが、その配偶者及び子供は客家語が話せない。

曾福寿氏も同じ状態で、両親とは客家語を話していたが、その配偶者及び子供はほとんど客家語が話せない。調査の協力はまだしてもらっていないが今後の調査に協力していただけたらそうなの人はもう一人、曾福寿氏の従妹である。60代、塘坊村生まれで、嫁ぎ先も塘坊村である。その配偶者及び子供はほとんど客家語が話せない。

以上が現在塘坊村で客家語が話せる住民の半数、5人の情報である。



写真05－客家語で会話中の曾福寿氏（左）とその叔父



写真06－穀物選別中の李朝暉氏（右）とその母親（非客家語話者）

● 台湾客家語

客家語は中国大陸以外に、世界中特に台湾での話者が多い。2013年8月台湾に出かけた折に、客家語話者と話す機会を得て、台湾の客家語の状況を知ることができた。

台湾には国立中央大学に客家言語文化研究所あり、客家語の研究を盛んに行っている。下記のように平江の客家語についても音韻、語彙、文法の三つの面にわたって、それぞれ修士論文が出ている。



写真07－国立中央大学に客家言語文化研究所研究員鄭曉峰氏とその学生彭淑鈴氏と

戴伶伊（2012）は湖南の三つの客家語方言（平江県黄金洞、攸県鸞山及び新田県門楼下郷）を調査し、その音韻比較を行った。作者は通時と共時の比較法を用い、三つの客家語と中古音の間の変遷を分析し、三地点の方言の内部差異をまとめた。平江黄金洞客家語については同音字表をまとめ、その音韻特徴を指摘している。陳沿佐（2013）も上述の三地点の客家語を対象にその語彙を調査分析し、異なる地域より湖南に移住してきたこれらの客家語が湖南に入ってから語彙変化と近隣方言との接触で起こった語彙変化について研究した。郭婉宜（2012）は湖南黄金洞客家方言の移動動詞「lok5 落」の多義性を研究し、その用法を他の方言と対比し、平江客家語の用法、文法化現象、その他の方言との対比を通して見られる共通性と特異性を探った。

以上を踏まえて、私は台湾の客家語状況及び研究状況などに興味を持っている。

今年度はアジア学の予算をいただき、国立中央大学の客家言語文化研究所に伺い、客家語研究者との交流を行った。更に関係学生のご紹介で、台湾での客家語調査を実行できた。滞在時間一週間のうち、4日間客家話者に調査した。客家語の主な方言である海陸方言と四県方言話者に協力していただき、両方のデータを採集できた。将来的には塘坊客家語のデータを、台湾の海陸客家語、四県客家語、塘坊客家人が話すもう一つの母語—平江城関方言と比較対照し、塘坊客家語の素性を明らかにしたい。現段階では四つの方言の同じデータ1000字、基礎語彙1200を持っている。整理でき次第分析していく予定である。



↑写真08－客家語海陸方言（陳春富氏）調査中



写真09－客家語四県方言話者楊碧君氏→



国立中央大学客家言語文化研究所は客家語検定試験の主催の機関でもある。今回の訪問ではその受験対策関連のテキストや語彙集を一式いただいた。これを参考に今後塘坊客家語の教材を作りたい。

←写真10－客家語能力認定教材

今回のフィールドでは台湾の客家語普及のコツを探るべく、新北市客家文化園区を見学した。ここは客家関連の生活用品や民俗道具などを展示しており、客家語の浸透のためにいろいろ工夫していることがよくわかる。例えばトイレの扉にも「みんなで客家語を学ぼう」コーナーがある。



←写真11－新北市客家文化園



↑写真12－客家語を学ぼう（新北市客家文化園区）



↑写真13－ちびまる子ちゃんの
人物関係図（客家語版）

台湾には客家テレビ局があり、子供にも言葉に興味を持ってもらうため、人気アニメの客家語版も上映している。

4. 今後の目標

2003年より調査を始めて以来、私の調査したことのある話者は二人（親子、70代、50代）ともなくなった。残りの話者は20人未満である。村ではほとんど客家語を聞くことがなくなった。消滅危機に瀕しているこの華僑の言語、塘坊客家語を記録し、伝えていくことに私は重大な責任を感じている。今は学術的な研究で、データの収集、分析、学術論文にまとめることに留まっているが、台湾の客家語教育を参考に、近いうちに地元に戻元できるような音声メディアやテキストなどの教材を作り、客家語の研修も行いたいと考えている。それを実行するために、引き続きアジア研究での予算を利用できたら助かる。全体的な記録と研究プロジェクトには大量な予算が必要なので、今年度はこれをテーマに科学研究助成金（基盤C）を申請する予定である。

言葉が消えていくことを止めるのは難しいが、スピードを遅くすることはできる。そこで私の使命が果たせるのだと考える。方言が人類文化の財産であることは言うまでもない。実際コンサルタントの曾福寿氏から客家語ができてよかった経験談を伺っている。

私の専門は漢語方言の記述である。漢語方言だけでなく、今は方言が消えつつある時代である。私のできることは消える前の方言の姿を記録し、資料として保存できるようにすることである。さらには方言話者の方言使用意識を高め、方言に親しみ大切にされる環境作りに力を入れたい。

附記：アジア研究予算及びその成果

2012年 学部長裁量経費Ⅰ型（学部重点研究・アジア研究）

在日華人の教育、言語と文化 代表（桑島道夫）

張盛開は在日華人（20人ほど）の言語使用に関する調査を行った。

2013年 華人の教育、言語と文化－トランス・ナショナルな華人アイデンティティの解明

代表（桑島道夫）

塘坊客家語の調査 平江 一日

桃園客家語の調査 台湾 半日

2014年 アジア学予算 台湾国立中央大学客家言語文化研究所の客家語研究の調査

塘坊客家語の調査 平江 一週間

台湾客家語の調査 台湾 一週間

学会発表 「塘坊客家語の文法特徴」 第七回漢語方言文法国際学会（陝西師範大学）

論文 一篇「平江塘坊客家語研究」東京外国語大学記述言語学研究室編『思言』第10号（近刊）

参考資料

陈晖・鲍厚星 2007 「湖南省的汉语方言（稿）」『方言』No. 3：250－259.

陳沿佐 中华民国102年／2013 「湖南客家話詞彙研究」 国立中央大学客家語文研究所修士論文.

戴伶伊 中華民國101年／2012 「湖南平江縣、攸縣、新田縣客家話音韻研究」 国立中央大学客家語文研究所修士論文.

丁声树・李荣 1956 『汉语方言调查简表』 北京：中国科学院语言研究所.

郭婉宜 中華民國101年／2012 「湖南平江客家話位移動詞「落」的多義性研究」 国立中央大学客家語文研究所修士論文.

張盛開 2014 「平江塘坊客家語研究」 東京外国語大学記述言語学研究室編『思言』第10号（近刊）